WOODTEC

本物の木と暮らそう

cue

13

特集

心に触れる銘木

WOODTEC 朝日ウッドテック株式会社

〒541-0054 大阪市中央区南本町4-5-10 TEL.06-6245-9505 発行／令和7年5月20日

床の記憶

MESSAGE FROM FLOORS.

53

小学1年、フローリングの上で縄跳び練習。

中学1年、フローリングの上でバットの素振り。

高校1年、フローリングの上でバスケのドリブル。

そのおかげでフローリングは **深い味わい** が出ました。

オンリーワンのフローリングが我が家の自慢です。

特集

心に触れる銘木

差別化の鍵 造作カウンターの新常識

造作カウンターは、多様な用途とデザインの可能性を持ち、住宅において重要な役割を果たします。窓枠やデスク、ベンチ、さらには洗面台など、さまざまな用途に対応でき、設計者にとって住まいの個性を引き立てる要素となります。

こうした中、当社では2023年末に、造作カウンター向けの銘木内装ボード「WOODRIUM ボード〈挽き板〉」を発売しました。今回の特集では、造作カウンターの魅力と可能性について掘り下げていきます。

（文／取材・西村）

KITCHEN & DINING

DESK

NOOK

SANITARY

造作カウンターは、空間の個性を際立たせるだけでなく、機能性や快適性の向上にも貢献します。では、現在の住まい手のニーズ、トレンドはどうなっているのでしょうか。

月間600万人が利用する住生活特化型SNS「ルームクリップ」の投稿データ分析によると、近年「造作デスク」や「造作カウンター」というキーワードの検索数が急増しています。これは在宅勤務や趣味のスペースを重視するトレンドの影響を受け、多くの人が快適な作業環境「ワークスペース」を求めていることを示しています。また、「ホームパーティー」の増加により、広々としたキッチンカウンターの需要も高まっています。

「ホテルライク」も注目のワードです。大理石をはじめとした石目調の素材が人気ですが、そこにウッドを組み合わせることで、冷たい印象を和らげ、温かみのある空間を演出できます。木の質感が加わることで、高級感と心地よさを兼ね備えた空間が実現できるため、ホテルライクなインテリアにおいても木製カウンターの需要が高まっています。

さらに、2022年頃から急激に注目されているのが「ヌック」です。ヌックとは「こぢんまりとした居心地の良い空間」のことで、一人時間やくつろぎの時間が増えた影響から、窓辺や階段下などに設けられるケースが増加。その際、木製のカウンターが多く採用される傾向にあります。

このように、造作カウンターは単なる作業スペースにとどまらず、暮らしの質を向上させる重要な要素として、ますます注目を集めています。

カウンター素材の現状

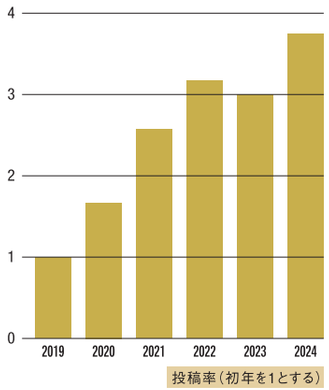
造作カウンターの人気が高まる一方で、その素材選びにはまだ十分なこだわりが見られないのが現状です。住宅における木質カウンターの約70%(当社調べ)は、安価なゴム集成材が採用されています。一方で、ダイニングテーブルなどの家具には広葉樹の銘木が多く使用されており、この対比は興味深いものがあります。

カウンターも家具と同様に、単なる作業スペースではなく、空間に温かみや個性をもたらす要素として考えられるべきではないでしょうか。ここで注目すべきが、銘木を使用したカウンターです。

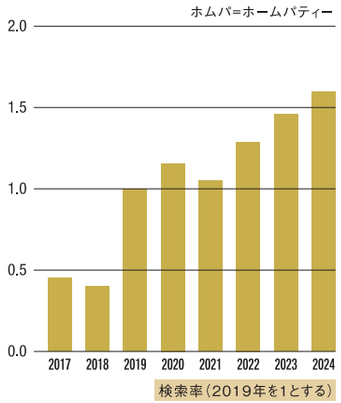
銘木カウンターの魅力

銘木カウンターは、家具と同じく空間の雰囲気を豊かにする役割を担います。銘木は自然の中で育まれた個性豊かな素材であり、木目や色合い、質感が一枚ごとに異なります。そのため、銘木を使ったカウンターは、世界に一つだけの特別な存在となります。

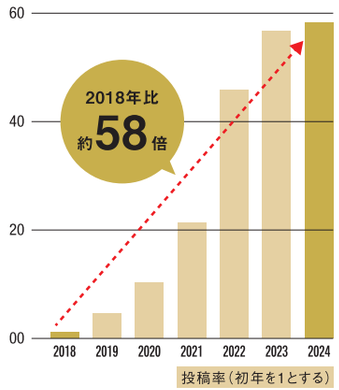
「ワークスペース」投稿水準の年推移



「ホムパ」検索水準の年推移



「ヌック」投稿水準の年推移



住生活に特化した日本最大級のSNS「ルームクリップ」における
各キーワードの投稿(検索)水準の推移

銘木本来の美しさが空間価値を高める——WOODRIUMボード〈挽き板〉と着色ゴム集成材の違い

	ブラックチェリー	ハードメイプル	ブラックウォルナット
WOODRIUMボード〈挽き板〉			
着色ゴム集成材	チェリー色	メイプル色	ウォルナット色

自然が描いた木目や色合いは、着色では再現できません。本物の銘木だからこそ、空間に深みと上質さが生まれます。

例えば、銘木特有の美しい木目は、光の当たり方や見る角度によって異なる表情を見せ、空間に動きを与えます。木材の持つ温かみのあるトーンは、家族や友人が集う場に心地よい雰囲気を生み出し、リラックスできる空間を演出します。また、手触りの良さも魅力の一つで、視覚だけでなく触覚を通じても快適さを実感できます。

当社が開発したWOODRIUMボード〈挽き板〉は、銘木の持つ美しさを最大限に引き出した内装ボードです。2012年に発表した、表面に挽き板を貼ったフローリング材「Live Natural Premium（ライブナチュラルプレミアム）」は、この10数年で大きく成長。床材市場ではニッチだった「挽き板」というジャンルを拡大、日本の住まいの質向上に貢献してきたと自負しています。内装空間の質をさらに高めるため、高級感のある挽き板の床材にふさわしい内装材は何か、と社内で追求するなかで、ライブナチュラルプレミアムと同じ挽き板を採用したWOODRIUMボード〈挽き板〉が誕生しました。挽き板を使うことで、一般的な無垢集成材に比べて巾継ぎピッチを広くすることができ、銘木の美しい木目、表情が愉しめる製品となっています。

銘木カウンターは単なる機能的な設備ではなく、暮らしを豊かにする重要な要素です。空間に自然の美しさを取り入れることで、住まい手に安らぎをもたらし、心地よい暮らしを実現します。

WOODRIUMボード〈挽き板〉は使用する高さを変えるとステップ、ベンチ、デスク、洗面カウンターなど様々な用途に展開ができる。写真はWOODRIUMボードの開発に助力いただいた建築家　神谷修平氏が当社70周年フェア用にデザインした展示。

WOODRIUMボードを使って
自宅をリフォームしました！

築50年の実家を二世帯仕様にリフォームし、今年1月から新たに暮らし始めました。

1階には親世帯、2階には私（西村）と妻、そして子ども2人の4人家族が暮らしています。

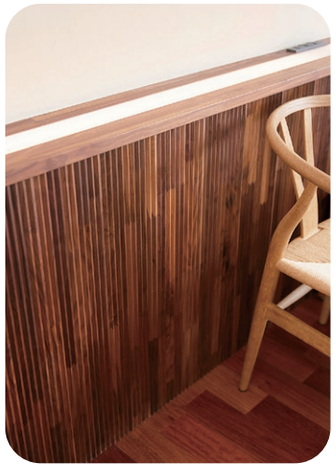
もともと1世帯で使っていた2階に家族4人で暮らすことになり、やや手狭に感じる場面も。そこで、少しでも空間を広く見せる工夫として、2階LDKの両側の窓を出窓に変更しました。

床・壁・天井をはじめ、内装には当社の商品を採用しており、住まい全体に木の温もりが感じられる空間に仕上がっています。

まだ小さな子どもたちが快適に過ごせるよう、リビングにはたくさんのおもちゃを収納できるベンチ型の収納を設けました。絵本をしまったり、子供たちの作品を飾ったりできる棚もつくりました。

1階では、両親の寝室を新たに設けるため、あまり使っていなかった座敷にキッチンを移し、ダイニングキッチンとして再生。妹家族や親戚が集まったときにも、みんなでゆったり食事を楽しめる空間になりました。

帰宅するとベンチの上には、いつもおもちゃがずらりと並んでいます。
WOODRIUMボード〈挽き板〉オーク。

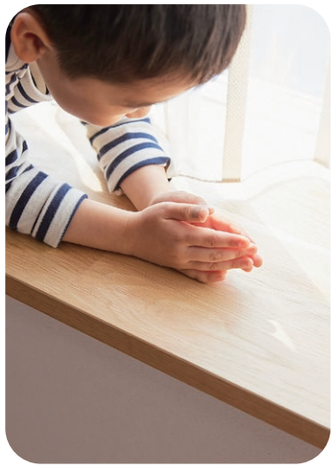


ベッドヘッドはWOODRIUMボード〈無垢〉ブラックウォルナットとthe wall Mタイプ。

2階寝室の棚板はWOODRIUMボード〈挽き板〉ブラックウォルナット。

1階DKの収納扉に
the wall Rタイプ スモークユーカリ。

1階DK。50年前、今は亡き祖母が新築祝いに贈ってくれた時計を大切に使っています。



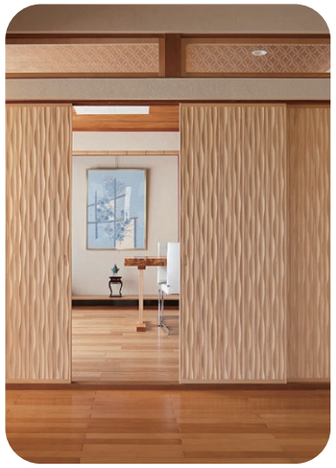
出窓カウンターも格好の遊び場。
WOODRIUMボード〈挽き板〉オーク。

2階LDK。床にアッシュ、天井にヘムロック、出窓カウンター、ベンチ、棚板にオークを採用。明るく優しい雰囲気となり、天然木に囲まれた暮らしが実現しました。

飾り棚は置く物を選ばず、
多目的に使えるのが魅力です。

ソファを壁面に組み込み、ヌック風に。両サイドの棚板はWOODRIUMボード〈挽き板〉オーク。

右手の奥行きが浅い棚は、
本の収納を中心に活用しています。



1階DKに入る戸襖に
the wall Sタイプ杉。

2階廊下のニッチは
WOODRIUMボード〈挽き板〉オーク。

2階LDKの天井は
the wall Rタイプ ヘムロック。

1階のダイニングキッチンの床には、「ライブナチュラルプレミアム　オークBRUSH」を採用。もともとは二間続きの座敷で、畳をフローリングに張り替えました。仏間や床の間、障子、欄間といった和の意匠を残す方針だったため、それらと調和する樹種を検討した結果、オークを選択。想像通り、既存の素材とも自然に馴染み、木のぬくもりが感じられる居心地のよい空間に仕上がりました。

2階は「ライブナチュラルプレミアム　アッシュBRUSH」。明るいイメージにしたかったのですが、もともと貼ってあったイタヤカエデの床とは変化をつけたかったので、MOMENT、RUSTICバーチなどとさんざん迷った結果、アッシュにしました。オークと比較すると、木目がはっきりしますが、濃淡が少なく木目にキラリと光るような白い光沢感があるため、落ち着きがありつつも明るいイメージとなります。

床選びのポイント

2階の床はアッシュ。環孔材特有のはっきりとした木目が魅力。
子どもたちの感性を育んでくれそうです。

1階の床はオーク。和にも洋にも合わせやすい
万能さが魅力です。

1階DK。真壁造りで現しの柱や梁、目透かし天井の
経年した色目にも馴染みやすいオークの床。

子どもの成長とともに、年月を重ねるほどに
深まる味わいを愉しめる空間になりました。

銘木が実現する住まいと暮らし

造作カウンターは空間の印象を大きく左右する重要な存在です。床と同じく天然木の銘木を使うことで、より心地よい空間になります。今回の自宅リフォームで、その価値を改めて実感しました。

木に囲まれた部屋で過ごすと、心身ともにリフレッシュできる気がします。やはり木には癒しの力があるのだと思います。

今後の住まいづくりにおいて、造作カウンターの素材にもこだわっていただき、空間を一層魅力的に仕上げる選択肢として、銘木の活用をぜひご検討いただければと思います。

「WOODRIUMボード」の開発に助力いただいた建築家 神谷修平氏に、
その魅力についてお話を伺いました。

空間に、ちょうどいい強さを

WOODRIUMには立ち上げ時のブランディングから関わらせていただいています。「リウム＝空間」には、木材の良さを、空間全体として考えようという意味が込められています。

僕は建築だけでなく、家具や照明も含めて空間全体を設計することを大切にしているんです。日本だと建築・インテリア・家具ってそれぞれの領域に分かれがちだけれど、すべてが〝同じ思想〟でつながっている空間にこそ、本質的な魅力が宿ると思っていて。WOODRIUMは、そういう考え方にフィットする素材でした。

私が保存・改修を手掛けた、葉山にある加地邸という有形文化財の住宅（現在は宿泊施設）があります。設計した遠藤新は、フランク・ロイド・ライトの高弟で、建築から家具、窓枠まで一貫した幾何学モチーフで統一されている。〝全一〟という考え方――すべてを統合的に設計する思想――が貫かれている。自分もそういう設計思想に共感したし、WOODRIUMには同じ可能性を感じたんです。

今回のデザインでは、WOODRIUMの挽き板――2ミリの厚さを、あえて見せる意匠を提案しました。仕上げ材として厚みを隠すのが一般的だったけれど、大理石のモールディングの素材の断面や輪郭が影を生む美しさにインスピレーションを得て、セットバックで段差をつけ、あえてレイヤー状の構成を見せたりしています。意外と、そのほうが木の本来の良さが出ます。

WOODRIUMのいいところは、自由で想像力を掻き立てること。僕だけでなく、いろんなデザイナーが個性を出しやすい素材だと思います。これは意外と珍しいことなんです。

住宅に使う場合は、空間に素材の統一感を出したいときにとても重宝します。床材とテーブルやカウンター、棚板まで、すべて同じ素材でまとめられる。別々に調達しなくても、空間に一本筋が通るような感覚になるんですよね。それが結果として、住まいの完成度を高めてくれると思っています。

木の魅力って、なかなか言葉にしにくいけれど、やっぱり〝安らぐ〟ってことが大きい。自然素材ってランダムで不完全なんです。完璧じゃない。その弱さが人に寄り添ってくれるというか。僕は石も使うけれど、木には〝ちょうどいい強さ〟があると思うんです。強すぎず、弱すぎず。暮らしの中で人が寄り添っていける、そんな存在。

木には愛着が湧く。傷が付いても嫌じゃない、むしろその人のものになる。そんな素材って他にはあまりないですよね。だからこそ、子どもが育つ場所にも、本物の木があった方がいい。きっと五感が育つ。感性が育つ。僕が隈研吾さんのもとで開発を担当した積み木〝TSUMIKI〟も、そういう発想から生まれたものでした。

WOODRIUMには、様々な感性を受け止める余白がある。木材の本質を考える大切なチャンスがあるから、若いデザイナーや建築家にも使ってほしいと思います。

（文／取材・西村）

神谷氏の代表作である中村人形のギャラリー「傀藝堂」内商談スペースのテーブルとベンチに採用いただいた「WOODRIUMボード／挽き板 ハードメイプル」

「傀藝堂」については次ページより詳しくご紹介します。

クリエイティブディレクター・一級建築士
神谷修平（かみや・しゅうへい）さん

1982年愛知県生まれ。早稲田大学大学院修了後、2007～16年に隈研吾建築都市設計事務所で設計室長として国内外の公共建築に携わり、16～17年はデンマークのBJARKE INGELS GROUPでシニアアーキテクトを務める。2017年にカミヤアーキテクツ設立。建築設計を軸に、家具・プロダクト・都市・文化研究まで多分野で活動。主な作品に「葉山加地邸」「傀藝堂」「THE CONE 軽井沢の逆円錐」。

「ナルインチク キニザケン」

人と人形が感動的に出会える場所

傀藝堂（かいげいどう）

建築家・神谷修平さんが手掛けられた「傀藝堂」は、
100年以上の伝統を誇る博多人形師・中村人形のギャラリーです。
商談スペースに採用いただいた「WOODRIUM」と
床材「Live Natural MRX」について、お話を伺いました。

傀藝堂はカミヤアーキテクツとして初めての建築になるんでしょうか。

そうですね、初めて完成した新築のプロジェクトです。むしろ、この物件に声をかけていただいたから独立しようと思った、とても大切な建築です。クライアントの中村人形さんとは以前からお付き合いがあったのですが、丁度独立前のデンマーク留学を控えていた時期にご依頼を受け、「処女作にしてください」と言ってくれて、6年かけて話し合いながら作っていった思い出深い建築になります。

傀藝堂のコンセプトやこだわったポイントを教えていただけますか。

コンセプトは「感動的に人と人形が出会える場所」です。

中村人形さんは、100年以上の歴史がある博多人形の家系です。先祖代々の教えである「芸術とは作るものじゃなく作らされるもの」という考えを大切にされていて、「この先100年も続く、地域伝統に根差した建築にしてほしい」とリクエストをいただきました。そこで、この土地だからこそ生み出せる唯一無二の建築を目指しました。

ギャラリーの場所は、もともと江戸時代から残る石垣擁壁の中の土の部分でした。その土地を掘り起こして地下にギャラリーをつくり、外壁には地元筑後川の砂利を左官に使用。色味はお隣の幼稚園の石垣からサンプリングし、まるで石垣擁壁が続いているような、地域に溶け込む仕上がりにしています。

また、この地域に多いY字路の構成をギャラリー内部にも取り入れ、回遊性を持たせています。Y字路は江戸時代に敵を迷わせて侵入を遅らせるための工夫で、ギャラリーにおいても回遊性を持たせ変化を楽しめる仕掛けになっています。私自身、呉服屋で育ち「滞在時間を長く楽しんでもらうこと」が商いの本質だと感じてきました。人と人形が〝空間〟ではなく〝道の上〟で出会うこの導線のつくりによって、より深く人形と向き合える時間が生まれています。

実際に来場されるお客様から「人形に集中できます」と言って頂けたり、オーナーの中村人形さんにも喜んでいただけているので、それが私たちにとって一番嬉しい言葉ですね。

神谷氏の処女作となった傀藝堂。「人と人形が向き合う場所」をテーマに、地域伝統に根ざしたギャラリーとした。

人形の柔らかさと対比するようなシャープな空間。
天窓からは人形の表情を引き立てる自然光が差し込む。

周囲の石垣擁壁に調和しながらも、彫刻のような存在感のある外観。外壁は地元筑後川の砂利を使った左官擁壁。

この地域に多いY字路の構成を取り入れたギャラリー内部。
土地の形に合わせて設計すると、偶然「人」の文字が現れたそう。

WOODRIUMをご採用いただいた理由をお聞かせください。

WOODRIUMを採用したのはお客様との商談スペースになります。ギャラリーで感動したお客様を迎え入れるとても大事な場所なので、ギャラリーとは違う温かみが欲しいと思いテーブルとベンチに採用させていただきました。

木の天板って柔らかくて扱いづらいものが多いんですが、WOODRIUMは文字を書いても濡れても大丈夫な強さと無垢の良さを併せ持っているところが良いなと。あと、中村人形さんってお客様を椅子ではなくベンチでもてなす文化なんです。椅子とは違った、一体感やカジュアルさのあるコミュニケーションをされていて、そこにも同じWOODRIUMを採用しています。

私は、いいものは天井・壁・床などの分節なく扱いたいと思っているので、高さによってテーブル・ベンチとさまざまな使い方ができるところがWOODRIUMの面白さだと感じています。

壁面にも当社製品をお使い頂いていますね。

はい。テーブルやベンチと同じハードメイプルを使った、フローリング「ライブナチュラルMRX」を採用しています。もともとは天井や床と同じグレーにする予定だったんですが、現場の最後で「もっとお客様に温かみを感じてもらいたい」という話になり、急遽採用を決めました。商談スペースはリモート会議の場所でもあるんですが、その背景としてもよい効果になっていると思います。

他にも、テーブルの脚部分はオリジナルの多面体の形をしていて、家具屋さんに作ってもらっています。既製品を使えば良いという考えもあると思うんですが、この商談スペースはお客様と中村人形さんのあたたかくやわらかい出会いが生まれるような場所にしたかったので、部材選びやデザインにかなりこだわっていますよ。

2階の住宅部分にもフローリング「ライブナチュラルMRX」を採用いただいています。設計士様視点で、当社フローリングの強みや特徴があれば教えてください。

住宅部分はお施主様が住まわれる空間なのでギャラリーと選び方は違いますが、一番は「ブランドとしての信頼感」じゃないでしょうか。今回の場合「ウォルナットが良い」というお施主様の希望があったので、他のメーカーさんも含め数種類から検討しています。当然もっとお値打ちな製品もありましたが、朝日ウッドテックさん製品の木材一枚一枚の表情をお施主様が気に入ってくださったんです。朝日ウッドテックさんでは木肌と色のばらつきも全て計算して作られている。そういう製造側のこだわりがユーザーやデザイナーに伝わるんだと実感しました。

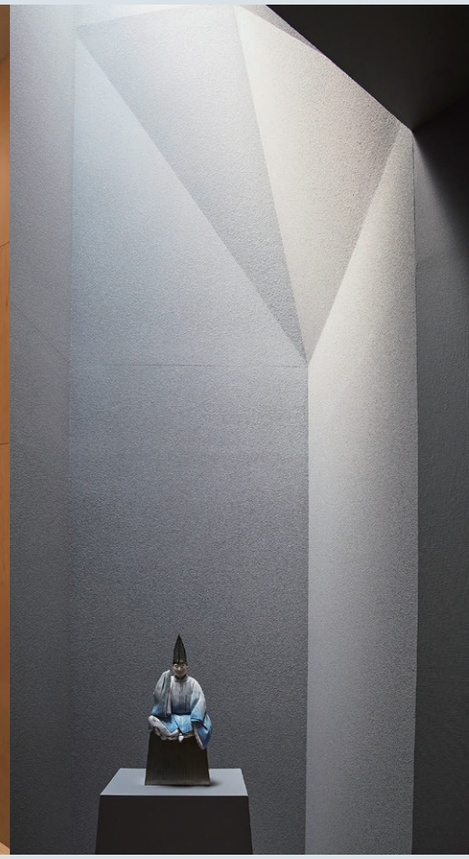
バリエーションの多さや安定した品質があり、設計側からもお薦めしやすいですよ。

最後に一言お願いします。

WOODRIUMはいろんなデザイナーに開かれている内装ボード材だと思います。今回テーブルとベンチに使わせていただきましたが、私に限らず、デザイナーの個性を還元しやすい製品だと思います。

（文／取材・山野）

床にLive Natural MRX（ブラックウォルナット）を採用いただいた、2階の居住スペース。光の反射が美しい、落ち着きのある空間。



テーブルとベンチにWOODRIUM、壁にLive Natural MRX（ハードメイプル）を採用いただいた商談スペース。ギャラリーで感動したお客様をあたたかく迎え入れる。

100年以上の伝統と
革新を融合させた博多人形

中村人形

中村人形4代目
中村弘峰（なかむら・ひろみね）さん

1986年、福岡市出身。2009年、東京藝術大学美術学部彫刻科卒業。11年、東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻を修了後、父・中村信喬に弟子入りし、家業を引き継ぐと同時に、従来の概念を打ち破る斬新な作品を発表している。

中村人形の特徴は、なんといっても自由な作風です。その時代に合わせて変化するべきと考えていて、私は4代目として、祖父や父とも異なるスタイルで「江戸時代の人形師がもし現代にタイムスリップしたら、どんな人形を作るだろう?」をテーマに作品づくりをしています。昔って写真がないので、目の前の人を人形にして珍重されていたんです。じゃあ現代の人形も、野球をしたりサーフィンをしたりしていていいよね、って。そうやって作り始めたら、周りの反応がガラッと変わったんです。人形って「ありがたいもの」「伝統的なもの」って、ちょっと距離を置いて見られがちだけど、もっと身近に感じてもらえるのが一番だと思っています。

神谷さんにお願いした「傀藝堂（かいげいどう）」は、実家を建て直すことになったタイミングで、長年の夢だった常設ギャラリーとして開設しました。これまでは百貨店での個展が中心で、開催中しか作品を見てもらえなかったんですが、常設のギャラリーができたことで、より多くの方に中村人形の作品を見ていただけるようになりました。

傀藝堂の「傀」という字は、〝人偏に鬼〟と書き、神がかった人を意味する文字です。祖父はよく「ものづくりを自分でしていると思うな。人形師は何か大きな存在に作らされているんだ」と語っていました。その言葉から、人形師が操り人形になったというテーマで、謙虚さを代々忘れないようにするためにこの字を選びました。そして「藝」は、その操り人形たちが見せる芸術。人形と人形師が一体となって表現する世界を、ここから発信していきたいと考えています。　（文／取材・山野）

今回の表紙に登場しているのは、
まもなく4歳と2歳半になる
やんちゃ盛りの西村家の息子たちです。

編集後記

私事ですが先日結婚しました。今は大阪の北摂エリアに住んでいるのですが、実は私が小さい頃に育った町でもあり毎日とても懐かしいです。近くにある小さな山（丘?）がお気に入りで、15分くらい登るだけで大阪の街並みが一望できるので、健康のためにもたまに上りたいなと思っています。（山野）

入社以来8度目の引っ越しで、ついに生まれ育った京都へ戻ってきました。京都市→忠岡町（大阪）→三鷹市（東京）→朝霞市（埼玉）→豊中市（大阪）→泉大津市（大阪）→堺市（大阪）→吹田市（大阪）→そして京都市へ。振り返れば「住めば都」、どの街にもそれぞれの魅力がありました。写真は、WOODRIUM越しに望む大文字山の風景です。（西村）

発行日　2025年5月20日
編集長　西村公孝
デザイン　鈴木信輔（ボールド）
発　行　朝日ウッドテック株式会社

cue 13

【cue（キュー）＝手掛かり、きっかけ】